

日本語指導支援教室の実践 — 兵庫県 公立小学校の実践から —

和氣 清 (神戸市立本山第二小学校)
古川 千香 (日本語支援教室支援員)

1. 日本語指導支援教室とは

本実践を行った学校の日本語指導支援教室は、市から指定された市内7校の日本語指導支援教室のひとつとして平成24年度から始まった。他の教室は、地域の事情を反映し、中国・ベトナム・フィリピン・南米の児童が多いという構成に個々の特色がある。

教室の年間計画は、各校の担当教師が作成しているが、実際の指導は、市から派遣される日本語支援員に任される。日本語支援員は、各校の特色上、母語を話せる人が担当していることが多い。市からの予算措置はなく、教材や教具は、各学校で創意工夫し実施している。開催される曜日や時間は、各学校の実情に合わせて実施しているが、平均して週1回、年間34回である。年に3回、各校の担当者と日本語支援員が集まり、それぞれの教室の活動の様子や教材などの情報交換をしている。

2. 実践校の日本語指導支援教室の特色

実践校では、日本語指導支援を行う教室を国際教室と呼んでいる。以前は、帰国児童の研究指定校や外国人児童のセンター校であったため、日本語の指導に役立つ教材もある程度教室内に備えている。

2.1. 児童の構成

上記のことから、1年中、海外から編入の問い合わせの電話がある。したがって、通常学級にも帰国児童やダブルの児童が多く在籍している現状である。日本語指導支援教室については、自由参加なので、編入時に教室紹介をし、参加者を募っている。今年度の延べの参加者は、以下のとおりである。

| | |
|----------|-----------|
| ・アメリカ | 6人(外国人2人) |
| ・オーストラリア | 2人(ダブル) |
| ・インドネシア | 1人(ダブル) |
| ・ペルー | 1人(ダブル) |
| ・中国 | 1人(日本に帰化) |
| ・ロシア | 1人(ダブル) |

日本での滞在期間が2年以上の児童が多く、最近では学校生活にあまり困難を感じていない。しかし、学習言語になると難しさが見られ、テストの文章が読み取れず、意味の取れない文を書く子も多い。

9月に、日本語が話せない2人のアメリカ人児童が編入してきた。しかし、活動を通してみんなと仲良くなり、学生ボランティアの援助もあり、ほどなく教室に溶け込んでいった。

2.2. 運営

教室運営は、低学年と高学年に分け、毎週金曜日の放課後に1時間ずつ行っている。低学年の参加者が多く、個別の支援が必要となるので、学生ボランティアの力を借りながら活動している。

3. 日本語指導支援教室の目標

日本語が全く話せない児童(英語圏を除く)には、県から多文化共生サポーターが派遣され、言語や学習への個別の支援が行われる。本教室では、それ以外の帰国児童や英語圏からの児童に対して、日本や学校生活への適応を図れるよう、以下の目標を設置した。

- ・日本語の生活言語や学習言語の語彙を増やし、学校生活に生かせるようにする。

- ・日本語と母語の比較を通して、日本語への理解を深める。
- ・日本と母国を対比させながら、日本の文化・風習への理解を深める。

4. 今年度の実践

4.1. 日本語の語彙を増やす

毎回の活動で、日本語支援員が児童に適した本を市立図書館から借りて、読み聞かせをした。現在いる児童の一番の楽しみの時間となっている。銭湯の絵本を読みながら、日本の風呂の習慣を話し合ったり、昔話を読みながら話の展開や登場人物について感想を出し合っている。その様子をそれぞれの学級担任に見てもらい、学級での声かけに活用している。

また、会話は出来ても、文章がうまくかけない児童も多い。日本語の文の書き方、特に作文に役立つように、4コマ漫画の手法を利用して、文作りに挑戦させた。さらに、その経験を発展させて、絵本作りにも取り組ませた。1枚の画用紙を貼り合わせての簡単なものだが、2学期から編入したアメリカ人児童もかわいい絵本を完成させていた。

4.2. 日本の文化や行事に触れる

今年度は、体験を取り入れた活動を行った。

・梅ジュース

梅干しは知っているが、青い梅を見るのが初めての児童がほとんどだった。6月に梅を洗い、氷砂糖とりんご酢に漬けた。期間を置いて、夏休みの教室で味見をしたが、海外に出かけている児童が多く、全員で味見ができなかったのが残念だった。

・月見団子

9月は、月見団子作りに挑戦した。手で団子の粉を捏ねるのに、少し抵抗があったが、丸めた団子が茹で上がって浮かんでくる様子に、大変興味を持って楽しんでいった。きな粉をまぶして、「三宝」に盛り、ススキの飾りつけをした。三宝

や敷き紙をどうやって置くのかを尋ねてきた子もいた。季節の行事に何か意味があり、手順や決まりがあるということに意味を感じた様子だった。記念撮影も大人気だった。

5. 今年度の活動を振り返って

この教室が始まって以来、絵本の読み聞かせは欠かさず行っている。読み聞かせの後、自分でもう一度読んで楽しむ姿が見られた。児童には、日本語の言葉のリズムに慣れると共に、日本について新しい知識を得る貴重な機会にもなったであろう。

今年度は、食をテーマにした活動を取り入れた。調理の場面でしか使わない言葉を学ぶことができ、友達と協力する楽しさもある。水気を取る・漬ける・捏ねる・丸める・茹でる・まぶすなどの生活言葉を知る機会になった。この体験は、絵や写真で日本の文化や行事を学ぶのではなく、五感を働かせて食文化にも触れられるよい機会となった。

体験活動をする場合は、全員になかなか目が行き届きにくい。その部分を学生のボランティアに助けてもらい活動を進めることができた。

6. 今後の課題

年間で大きなテーマを設定した活動を通じた学習であるため、個々の学習言語の力をどれだけ伸ばせているのか客観的には見えにくい。個々の日本語力を伸ばすための活動をどう作るのか、伸びをどう測るのか今後も考えていきたい。

付記

本実践は、甲南女子大学の学生ボランティア、谷畑 佳織さん、三島 帆南美さんに協力を得た。